
魔女と異端と赤い肩

ネア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女と異端と赤い肩

【Nコード】

N2723S

【作者名】

ネア

【あらすじ】

百年戦争の再燃。戦端が開かれるは惑星クエント。戦火の中に一人の兵士がいた。

【熱砂編】

砂漠の出会い。それは偶然か、必然か。魔女と死神が会おうとき、その運命は。

機体設定（前書き）

主人公がここまで搭乗した機体の設定です。

作中で説明できず申し訳ない。いずれ改定時に補充するつもりではありますが・・・。

今後は機体が絞られてくると思いますのでできるだけ描写していきますと思います。

機体設定

ATM-09-BC スコープドック？ブラッド隊カスタム【AT】

・機体性能

傑作機スコープドッグ？に特殊装備類への適応性と戦闘持続性、機動性を向上した機体。

百年戦争終結後試作開発された新型スラスタを実装している。
メルキア戦にて全機大破し、その後同型カスタム機は開発されていない。

・装備

アサルトライフル

バズーカランチャー

投擲弾

コンバットナイフ

アームパンチ×2

（ブラッド8のみ）レーザースナイパーライフル

（ブラッド12のみ）ECMパック

・主な搭乗者

ブラッド隊

PRI-11（鹵） グラスゴー（鹵獲）【KMF】

・機体性能

グラスゴーに同じ。サンドライダーを装備しているため砂漠ではサザールランドより若干機動性が高い。

中東某国が鹵獲して使用しようとしていたが破壊される。

カラーリングはデザート迷彩に関節はサンドブラウン。

・装備

アサルトライフル

リニアランチャー

スタントンファ×2

スラッシュハーケン×2

投擲弾

腹部対人機銃

・主な搭乗者

ジャック・サイファー、傭兵

PRI-13D サザーランドD【KMF】

・機体性能

エリア18最終作戦において降下に使用された、局地戦仕様のサザーランド。防砂改造を施すためにハーケンが取り除かれている。カラーリングはサンドカラー。

・装備

80mmレールライフル

スタントンファ×2

SHG（流体サクラダイト投擲弾）

内臓式対人機銃

・主な搭乗者

ジャック・サイファー

PRI-13J（RSC） サザーランド改【KMF】

・機体性能

関節部のモーターを強化し、ランドスピナーを大型化することによって基本的な機動性能を底上げしている。

頭部が純正のものから、角の無いものに変えられている他、右肩に縦に長いシールドが取り付けられている。

コックピットを切り詰めるために居住性は悪く、脱出機能もオミットされている。

カラーリングは黒に、右肩とシールドのみ血のような紅。

・装備

アサルトライフル改（バレルが通常のものより長い）

リニアバズーカ

腹部内臓式機関砲

左腕スラッシュハーケン

スタントンファ × 2

S H G

・搭乗者

ジャック・サイファー

転移（前書き）

いろいろあって久々の執筆。よろしくお願いします。

転移

「神はいるか」と聞かれたらあなたはなんと答えるだろう。
いる。いない。または心の持ちようか。

『神』を継ぐことを拒否した男は「神は死んだ」と答えるだろう。

彼の生きる世界では誰もがそう答える。
誰もが皆疲れきっているから。

アウトラギウス銀河でようやく消えようとしていた戦火は、ギルガ
メス暦7214年8月、惑星クエントの消滅によって再燃した。
しかしそこに『異能者』の姿はない。

『神』を継がなかった男は戦いを捨てようとして、愛する人ととも
に虚空の宇宙に消えた。

だが、物語はこれで終わりではない。
物語は続く。

もう一人の『異能者』を中心にして。

ギルガメス暦7215年7月、第四次銀河大戦が勃発。

同時にバララント軍が惑星メルキアを急襲。

同月18日のことであった。

GIL7215・JUL18 15:00

惑星メルキア衛星軌道上 バララント軍先遣艦隊旗艦<リッジウッド?> CIC

先遣艦隊司令スティーヴン・レイヤード中将

「衛星軌道上の敵部隊の撃退を確認。各艦より降下AT部隊発進」

「アルファ、ブラボー、チャーリー各隊は橋頭堡を確保せよ」

艦隊司令のレイヤード中将はブリッジで黙考する。

オペレーターたちの声はどこまでも冷静で、これが戦争だと、ここが戦場だと感じさせない。

無機質な宇宙にいると人間まで無機質になってしまふのだろうか？ふと浮かんだ考えを頭を振って振り払う。

（今は作戦中だぞ。集中しろ！）

しかしどうにも集中できない。今年で38歳になるスティーブン・レイヤードは百年戦争終盤からバララント軍に従軍し、各会戦で戦果を挙げ、36歳という若さで中将の位についた。

その一年後に停戦条約が結ばれ、37歳になったレイヤードは早くも退役を考えていたのだが、その矢先の再開戦であつたのだ。

「アルファ降下完了。消耗率27%」

「ブラボーより報告。消耗率8%ながらも損傷機多し。補給部隊と支援を求む」

「チャーリーの被害甚大。消耗率63%。ブラボーと合流し再編します」

「まで、チャーリーは迂回してアルファと合流せよ。補給施設があるはずだ」

あわただしくなってきた戦局に対応するためにレイヤードも指示を飛ばす。

降下支援のための艦隊は衛星軌道に留まっており、地獄が展開されているであろう地上と比較するとまさしく天国であった。

同時刻

惑星メルキア周辺宙域 ギルガメス軍強襲巡洋艦<アンタレス>

A T 格納庫

???

《チーム・ブラッド各員聞こえるな、最終ブリーフィングを開始する》

狭苦しいA Tのコックピットの中、画面に現れた上官がだみ声で喋りはじめ、正面のモニターに詳細図が表示される。

《ブラッド1から6は衛星軌道上の艦隊を攻撃、無力化せよ。7から12は降下、地上の防衛部隊を排除せよ。軌道上の部隊排除後はブラッド1から6も降下し参加する。なお・・・おい、貴様ア！聞いているのか、ブラッド4！》

どうやらぼんやりしていたようだ。ふっと視線を上官に戻すと激怒

した赤ら顔が見える。

「はっ、聞いております」

《ふん、いいだろう軌道艦隊へは貴様に先行強襲してもらおう》

（いやらしい笑みを浮かべるんじゃない。こっちはモニターだから嫌でも汚い面を見なきゃいけないってのに）

《まもなく作戦宙域。各員は発進に備えよ。繰り返す、各員は発進に備えよ》

オペレーターの声とともに自分と周囲の鉄の騎兵が呼吸を始める。

ATM-09-BC スコープドック？ブラッド隊カスタム

百年戦争の傑作機ATM-09を特殊任務用に改造したものである。その両肩は血に濡れたように赤く染まっていた。

同日16:24

惑星メルキア衛星軌道上

???

「こちらブラッド4、目標に接近。まもなく敵のレーダー圏内」

《こちらブラッドリーダー。ポジションに着いた。敵にくアンタレス>の位置を特定されるな。117秒後に行動開始。OVER》

「ブラッド4了解」

ここから先は通信はできない、敵から発見される恐れがあるからだ。慣性だけで敵艦に近づいていく。

あと60秒・・・。50・・・。40・・・。30・・・。にじゆ・
・！？

突然の爆発。敵にずいぶん勘のいい奴がいたらしい。

《こちらブラッドリーダー。ブラッド4、作戦変更だ。交戦せよ、全兵装自由。OVER》

「了解」

鉄の血管をポリマーリングル液が流れ、その体軀を殺戮へと駆り立てる。

正面に敵ATが二機。B・ATM-03 ファッティーだ。こちらの発見された箇所へあわてて移動中のようなだった。

瞬間的にスラスターを吹かし、目標に肉薄し発砲する。

一瞬で一機がヘヴィマシンガンの掃射を浴びてスクラップと化し、振り返って手にしたカタパルトランチャーを向けてきたもう一機もすぐに僚機のとを追う。

こんなに早く増援が現れるとは思っていなかったのか、八隻の敵艦からわらわらとアリのようにファッティーが這い出してくる。

敵の数に舌打ちすると、五機ほどの敵機がこちらに狙いを付けてきた。

激しく機体を振って射線を回避すると、狙いもつけずに弾をばら撒

く。弾丸は二つの火球を作り出し、一機の両足をもぎ取った。察機の死に激発したのか一機が突っ込んでくるが、軌道が直線的で読みやすくあつという間に宇宙のゴミと化す。

一方もう一機は冷静だった。ノーマルカラーでない蒼いファッティーは左腕のシールドを掲げながら、右腕のリニアガンに向けてくる。三発の弾丸のうち一発が肩のアーマーパットを掠めていきヒヤリとさせられるが、わずかな操作で回避し、その間にショートレンジまで詰め寄ると、目前に構えたシールドを蹴り上げアームパンチを叩き込む。

辺りを見回すとすでに残っているのは旗艦ともう二隻だけのようで、それも大破ないし中破しており戦闘不能のようだ。

《こちらブラッドリーダー。オールブラッドへ、状況知らせ。O V E R》

戦闘が終息し、通信が聞こえてくる。

《ブラッド2、脚部を損傷し戦闘不能です》

《ブラッド5、生きてるぜ》

「ブラッド4、健在」

《ブラッド3、6は・・・反応がないか。4、5。私に続け、A T 降下用ポット（バケツ）で降下する。増援がくるまでに味方と合流する》

《《了解！》》

「了解・・・」

ふと惑星メルキアにカメラを向ける。
眼前に浮かぶ見た目は蒼い星。反面、中にどす黒い流血と膿を抱えて、他人を引きずり込もうとしているに違いなかった。

同日18:37

惑星メルキア ローラシル大陸南部 ギルガメス軍第267拠点基地内 バララント軍指揮車両
アルファ隊隊長 ニコル・エッジマン大佐

《こちらA5-1。司令部を制圧》

「了解です。A2からA4の隊は撤収。北距離2700に位置する大規模な総合司令部の攻略に移行します」

「順調だな」

報告される戦果に思わずほくそ笑む。ギルガメスの首都星という事で全滅も覚悟の上の作戦参加だったが、思いのほかうまくいっている。

艦隊との通信途絶だけが不安要素だが・・・。

（俺にも運が向いてきたか）

黒に赤い両肩をしたスコープドッグを見たときは『例の部隊の亡霊』

かと思いゾクリとしたが。

だが被害を受けたのは自分の隊ではなくチャーリー隊だ。敵機も壊滅させてやった。

「全軍、進め！」

にやけた口をキツと噛み直し、前進を告げた。

G I L 7 2 1 5 . J U L 1 9 2 : 3 1

惑星メルキア ローラシル大陸 南西部 南ローラシル総合司令部

ギルガメス軍基地内

???

降下したブラッド隊は他のメンバーのロストと防衛線の限界を知る。そこで、＜アンタレス＞とローラシル方面隊の両隊は総合司令部での籠城による時間稼ぎを命ぜられた。つまりは足止めのための捨て駒だった。

敵は基地の南方に布陣し、集結しつつある。

2 : 3 5 バララント軍、前進開始。

2：4 2 バララント軍第一陣、ギルガメス軍基地内部に侵入。

2：5 8 ブラット隊、バララント軍と交戦開始。

3：1 2・・・。

「ハアツ・・・、ハアツ・・・、ハアツ・・・」

自分の呼吸が嫌に耳障りだ。

いかんせん敵の数が多すぎて状況の把握すらまともには不可能である。

ブラッド5は目の前でレーザーガンの餌食になった。

戦線に復帰していたブラッド2も残骸を見かけた。

ブラッド1との回線はノイズばかりで繋がらず、＜アンタレス＞はいるはずの方向から盛大な爆発をほんの三分前に見た。

司令部は初めから機能していない。

息をつく間も無く次の敵機が来る。

ローラーダッシュで横滑りをかけ、射線をかわしてコンテナの影に入る。

つられて追いかけてきたところにヘヴィマシンガンを三点バーストで発射し、鋼鉄の死神はコックピットのパイロットの命を正確無慈悲に狩り取った。

しかし再度左側から二機現れる。フルオートでトリガーを引くが弾を吐き出したのは四発までで、不満げに空撃ちの音を響かせた。

しかし一機のATを各坐させることに成功し、もう一機はローラーダッシュで肉薄し、アームパンチでしとめる。

「ハアツ・・・！！ハアツ・・・！ハアツ・・・」

敵機の波がやんだ。静か過ぎてかえって不気味だ。

違和感を感じ、ブラッド1に通信を入れようとしたとき『ソレ』は起こった。

G I L 7 2 1 5 ・ J U L 1 9 3 : 2 0

ローラシル南西部で大規模な爆発を確認。

ギルガメス軍は撃沈した敵艦の落着と発表。

歴史書はこの激しすぎる前哨戦を語ろうとはしない。

ただ、この後の戦いが『メルキア防衛戦』とだけ記されるのみである。

皇暦2017年

中東 砂漠

???

暑い。

瞳を閉じたままで周りは見えないが、耐熱服の上からでも熱線にさらされる感覚がする。

目を開けて上体を起こすとそこには一面の砂、砂、砂……。ヘッドギアをはずして投げ捨てると銀髪がさらさらと熱風に揺れた。

状況の把握もできぬまま、男は一步を踏み出した。

転移（後書き）

肥大を続ける帝国。

疲弊を続ける人類。

どこに行っても人の性は変わらない。

出会うのは魔女か、聖女か。

次回『砂塵』

聡明な瞳が睨むは人か、死神か。

砂塵（前書き）

ボトムズ知ってる人居るんでしょうか・・・。不安

砂塵

皇曆2017年 昼

中東 オアシスの町

???

そこがどんなに乾燥していようと、それがどんな地獄であろうと生命は存在している。

砂漠のような厳しい土地柄だと、それに呼応するように小さなオアシスの市にも活気があふれている。

しかし、巨大帝国ブリタニアの侵攻の手が迫り、随所に軍用ジープや装甲車、さらには鹵獲したのか基地のほうにわずかばかりのRPI-11 グラスゴーの姿も見える。

Knigh t Mare Frame

KMF、ナイトメアと呼ばれるそれは全高4〜5mとなっており、

ATと同程度かやや大きい位だ。

しかしながらKMFの方が圧倒的に細身であり、初めて見たときは自分が乗っている訳ではないというのに、強度に不安を覚えたほどだった。

だがその圧倒的な機動性は凄まじく、ATをボトムズ（最低のマシン）と言わしめる搭乗者の安全性についてもKMFは高いようだった。

そこまで考えてはつとずる。

ここに来てても結局考えることが戦いに繋がっているではないか、と。

惑星メルキアの激戦の最中に閃光に飲まれ、つづいてバーナーを浴びせられるかのような日光と身を削る砂の海。

運良く砂漠に行く隊商に出会わなければ今頃干からびていたかもしれない。

拾ってくれた隊商の長ムバラク氏は水をくれ、こぶのある動物（砂漠の生き物でラクダというそうだ）に乗せて町まで送ってくれた。

巨漢と小男を連れた人のいいおじさんと言った感じのムバラク氏はここいらを旅する行商で、戦乱の兆しを感じて移動している最中なのだそうです。

なぜ砂漠に居たのかと問われ返答に窮した俺にそれ以上聞かずにいてくれ、これから向かうオアシスの町の歴史について教えてくれたのである。

このとき気づいたことがある。彼が話しているのはアウトラギウスで話される言語ではないようだったが、俺はそれを正確に理解することができたのだ。

一抹の不気味さと、これも『候補者』であつたことに由来するのかと考えてふきだす黒い感情があつたが、ムバラク氏が熱射病にでもなつたのかと気を使ってくるのでなんでもないと首を振ってごまかしたのだつた。

ともかくオアシスに着き、ムバラク氏に礼を告げて隊商から離れた俺は特にすることもなく市を見歩いていた。

しかし、この市で軍用コートの、さらには銀髪を隠すためのフードを目深にかぶつた人間は非常に目立つようで、先ほどからチラチラとこちらを伺う視線がずいぶん多かった。

当然、よそ者にたかつてやろうという奴も居るのである。

当面の資金にしようと軍用腕時計を売り払い店を出た直後のことである。

「おう、にいちゃん、ツラかしな」

眼帯をした男と柄の悪い三人をあわせた四人組だった。

そのまま囲まれて裏路地に誘導されるが住人は見て見ぬ振りをしてそそくさと去っていく。

怯えている様子からしてどうやらここいらで幅を利かせているごろつきのようであり、彼らにとって幸いなことに周囲に警邏の類も居ないようである。

「オラ、出すもの出しな」

「・・・」

「聞いてんのかヨオ！・・・オガアツ！？」

黙っていると焦れたのか一人が殴りかかってくるが腕を極め、肘を顔面に叩き込むとあえなく気絶する。

「手前エ！」「死に晒せ！」

口々に罵声を吐きナイフや警棒で飛び掛ってくるがその動きは軍で仕込まれたものほどではなく、膝を叩き込み、延髄に手刀をいれると悶絶し倒れる。

「動くな」

立ち位置的に背後に居る眼帯が銃を構える。

懐のアーマーマグナムに手を伸ばしかけたところでガシャンという音とともに眼帯が倒れた。

「どうも」

人のよさそうな笑みの後ろに巨漢が花瓶を抱えて立っていた。

「いやあ災難でしたね、彼ら」

にこやかな笑みの裏に何か大量に隠しこんでいそうで少々不気味だが、助けてくれたことには相違ないのだ、あのままでは撃たざるを得なかったかも知れない。
しかし・・・。

「どこに連れて行こうというんだ」

「いえ、ちょっと見せたいものがありましたもので」

馬車に揺られ、前方に見えるのはおそらく・・・軍事基地。
しかしそれよりも気になるのはあの人型の機影だ。

「あれは・・・AT!？」

「AT? あれはKMF、ナイトメアフレームですよ」

「ナイトメア・・・フレーム・・・」

その後ムバラク氏にKMFの講義を受け（敵国の兵器になぜそこまで精通しているのかは謎であったが）、冒頭に至るのである。

ここまで見せ付けられればさすがに気づく。

ここはアウトラギウスではない、と。

脳内は混乱の極みにあったが、まずは目先のことである。

なぜこの商人が自分をKMFに引き合わせようとしているかは皆目見当もつかないが、行ってみない事には分かるまい。

前方には暗く、巨大なゲートが大きく口を開けていた。

同日 夕刻

中東 軍事基地 地下格納庫

???

暗い倉庫内には三十機ばかりの鋼鉄の騎士が並んでいた。
外に出ていたグラスゴーとやや風貌が違ふあたり、独自改修を加えてあるのだろう。

「それで」

「？」

「なんで俺をここに？」

「勘……ですかね」

「勘？」

「わたしは商人ですからね」

「・・・」

答えになってないだろうと言う言葉を飲み込む。

「あなたはKMFでの、もしくはそれに近しい戦闘経験が有りでは？」

「それも勘、か？」

「ええ」

この男は『奴』の手先なのだろうかとも考えたがそれはありえない。ここはアウトラギウスではないのだし、なにより『奴』は死んだはずだ。

「俺に乘れ、と」

「戦闘経験については仰らないのですね。まあ、そうです」

乗れないことはない、と言うより乗れないことは『ありえない』。戦えと言うなら戦おう。この身にできるのはそれだけだ。

「分かった」

「ありがとうございます。ああ、名前を伺っておりませんでしたな」

「俺は・・・ブラッド4だ」

明らかに本名ではないのだがムバラク氏は顔一つ変えず、なおも人

のいい笑みを浮かべるばかりだった。

同日

中東 エリア18進行軍 G1ベース
戦略会議

G1ベースでは先ほどまで起こっていた敵戦車部隊との戦闘後の再編が行われていて、司令官であり戦線で戦う将である女性が部下からの報告を受けていた。

「それは確かか」

「は、敵が南東に位置するオアシスに鹵獲したKMFを含む部隊を結集させているのを偵察部隊が確認しています」

「わが軍に決戦でも挑むつもりか、愚かな。いま動かせる隊は？」

「各軍ともに降着状態と散発的戦闘が続いており、三部隊ほどが限界かと・・・」

兵站係と部隊の調節を勤める士官は緊張のためか顔が青い。

「よい、私と直属の隊が出る。ギルフォード、ダールトン、行くぞ！」

「イエス、ユア ハイネス！」

『ブリタニアの魔女』が出る。

同日 深夜

中東 軍事基地 地下格納庫

???

グラスゴーのコックピットで技術士官に説明を受ける。しかし完全なモニター式には慣れておらず、周囲確認の段階から苦戦する。ATならばスコープと直結だったのだがKMFはモニター式だ。

「大丈夫なんですか、彼」

「大丈夫さ」

「それも？」

「もちろん、勘」

下では（本名かすでに怪しいが）ムバラク氏が技術士官と会話している。

その時だった。

けたたましくブザーが鳴り響く。

佐官らしい男が無線に向かって怒鳴り散らす。

「どうした!」

「ここを発見されました！監視用のトーチカが破壊され、敵のKM Fがこっちに向かってきます！」

「ええい！機銃出せ、戦車およびヘリの展開急げ！ミスター、KM Fは出せますか？」

佐官は矢継ぎ早に指示を出し、ムバラク氏に問いかける。

顔色は変えずちよつと考え込むような動作をすると、パチンと指を鳴らして告げた。

「まだ戦闘で乗れないレベルが五人、そこそこが二人、亡命者が六人ですね」

「分かった。最初の五人は撤退部隊とともにKMFを輸送、二人はその護衛、亡命者は三人一組で小隊戦闘だ。急げ！」

「まあ妥当ですね。彼はどうします？」

「戦闘中にあわせる。問題ない」

「分かった、貴様は遊撃だ。頼むぞ」

「了解」

敵はすぐそこまで迫っている。

ATでもKFMでも鉄の棺桶の感覚は変わりしなかった。

戦略基地S - 2は砂漠の地下に建設された要塞である。

町のちょうど真下に建造されており、町や住人自体も防衛機能としてゲリラ戦闘能力を持っている。

入り口は二箇所存在し、一箇所が正面ゲート、もう一箇所が地下通路を通る撤退路となっており、正面ゲートを突破しても内部は細い通路と防衛側に有利な構造によって、侵入者を疲弊させるのである。

基地施設に接近したブリタニア軍は早速機銃と戦車砲の洗礼を受けていた。

死者は出ていないが、KMF二機が無人機銃に蜂の巣にされ戦闘不能にされた。

しかし、市街部に入ったことによって戦車砲が効力を低下させたために平原よりは脅威は低下していた。

市街戦こそが真骨頂であるKMFは、しかしながら別の脅威に足元を掬われるのだった。

某日 0:07

中東 S - 2 基地

ブリタニア軍

「クソッ、こいつらぁ！」

「うるちよると、劣等民族が！」

建物の二階、道路脇の側溝から現れる民兵、通路に張られたワイヤー、落とし穴にオイル、さらには偽装された遠隔爆弾に地雷まで、こちらの動きを制限し、誘導し、強襲する。ストレスに負けて飛び出せば、待つてましたとばかりに対戦車ライフルの餌食だ。

元来市街地における敵機甲部隊の制圧に主観をおいているKMFは、その設計思想ゆえに対人武装がないわけではないが多くはなく、地上の民兵と空中のヘリに執拗につつかれていた。そんなとき、ワイヤーにかかり転倒した一機のKMFに民兵のRP G-7が狙いをつける。引き金を引かんとしたその瞬間に民兵はスラッシュハーケンに取って代わられた。

《何をやっている》

パイロットがビクリと震える。味方だというのにその存在は脅威であり、そのKMFパイロットの精神に多大なプレッシャーを与えていた。この人物が憤っているのは味方を殺傷せしめた敵ではなく、敵に殺傷せしめられる情弱な味方なのである。

駆るは最新鋭のナイトメアPRI-209 グロースター。

防弾、対光学兵器マントに金色の槍が特徴的な機体を走らせ、敵を屠る。

その直属の戦闘能力も他とは一線を画しているのだ。

ヘリの姿はすでになく、暗闇に包まれた町は戦闘前の静けさを取り戻していた。

「報告を」

《敵の地下施設入り口を発見。現在交戦中です》

《敵に鹵獲機と思われるグラスゴーを確認しました》

「撃破しろ、今回の作戦目標だ」

《イエス、ユア・・・ん？なん・・・うわぁっ》

「どうした、応答せよ」

応答が消える無線。移動するKMFの中で『ブリタニアの魔女』は何か拭いきれない予感を感じていた。

同日 0:37

中東 S-2 基地

???

細い通路を駆け抜けてゆく。味方が食い止める正面ゲートを支援するべくランドスピナーで疾走する。

しかし、乗り心地が良すぎるなこれは。

《聞こえザザッ・・・ト4・・・ブラッド4》

「こちらブラッド4、状況は」

《味方は損害大きく撤退中。さらには撤退中の輸送隊が強襲されKMFが壊滅、状況が良くない。最低でもあの六機だけは回収したい。頼むぞ》

「了解」

通路を抜けるとそこは地獄だった。

もはや戦車隊もヘリ隊も壊滅し、KMFだけとなった防衛側は建物の特性も相まってか善戦していた。

しかしながら物量凄まじい帝国軍を相手に押され、一機が武装を失っていた。

帝国軍のRPI-13 サザーランドがアサルトライフルを構える。この第五世代KMFはグラスゴーよりすべてのスペックにおいて優れ、高い戦闘能力を持つ。

しかしながらそのパイロットはそれを満足に発揮できなかったようだ。

その頭がはじけ飛ぶ。

火花を上げてホイールがすべり、一機のグラスゴーが現れる。

他のサザーランドが四機ばかり対応しようとするが、防衛側の射撃に阻まれる。

「こちらブラッド4。支援する」

《了解。俺はアデル。小隊員はレゲルとマイルだ。まあ本名じゃないのは事情でな、よろしく頼む》

「撤退命令が出ている。撤退用の通路自体はまだ気づかれていないはずだ、そこから脱出する」

《わかった。レゲル、マイル、撤退を開始する。第二小隊に先に引いてもらう、もう少し粘るぞ！》

《《了解！》》

ランドスピナーで後退をかけ、後には弾丸の嵐を残して撤退してゆく。

グラスゴーに自分もターンさせようと振り返ったところで、警報。

（サザーランド？ いや特機か）

その機体と正対する。

装甲越しに殺気と視線が重なった。

砂塵（後書き）

戦場において恐怖とは敵である。

ゆえに敵に恐怖を叩き付けて捨てる。

強兵はそれが大きいだけだ。

皇女は恐怖に屈しない。

次回『魔女』

では、恐怖が自ら近づいてくるのなら？

魔女（前書き）

さくさくいきます。ようやく主人公の名前を出せました・・・。
あと、KMFにオリジナル設定がございますのでご容赦を。

魔女

誰がどうして戦争を始めたかなんて末端の兵士には関係ない。

取り仕切っている上の人間でさえも理由を忘れているのだから探すこと自体が無意味だ。

泥沼と化した戦争なら特に。

終わるときなど知りはない。

今が終わった後、生きてさえいればいいのだから。

皇暦2017年 某日 1:01

中東 S-2基地

???

現れた特機はずいぶんとあからさまな格好をしており、さらに単機だった。

狙いはおそらく撤退中の鹵獲KMF。つまり俺もターゲットの一人。

《旧式で、なおかつ単機で私に立ち向かうか、その勇氣だけは評してやろう》

言うが早いかライフルで牽制しつつランスで一突きにしてくる。

スタントンファアでいなしマシンガンを構えるが、スラッシュハーケンで叩き落されさらにもう一度ランスを放ってくる。

だがこれかわし、足に向かってスラッシュハーケンを発射。

かわされるがそのまま巻き取ってその反動で近接の一撃を加える。

《ちい！旧式ふぜいが》

苛立ちも露に突進してくるが、作戦目標は味方撤退の完遂。それは自機も含まれている。

突進をかわして後ろの扉に入ると、落ちていたアサルトライフルを拾い後退する。

《逃げるか、腰抜けが！》

さらに追ってくる。

機体性能で負けるのなら、こちらの有利なフィールドで戦うまでだ。狭い場所ならKMFはその行動を制限される。

後ろからの射撃をかわしつつ、荷物の並んだ倉庫に着くと振り返って1マガジンをオートで掃射し、発生した煙に乗じて荷物に隠れる。すぐに気づくだろうが・・・。

《そこかあッ！》

発見しこちらに迫ってくる敵に対してハーケンを発射するが切り落とされ、接近しつつ必殺の突きを繰り出してくる。

グラスゴーは左腕を突き出すようにして防御した。

ランスは魚に串を通すように腕に突き刺さり、その前進を止めた。特機はランスを動かせなくなったと見るやライフルを構えるが、先ほど自分がそうしたようにしてハーケンに止められ、損傷したライフルは暴発したのか爆発すると、グラスゴーのハーケンも巻き込まれて砕け散る。

もはや弾も無くランスで礫にされたグラスゴーの無防備な胴に向け、特機は近接で潰されていないほうのハーケンを撃ち出そうとす

るが・・・。

《動作不良だと、ええい！》

ハーケンは沈黙し動かない。

そのスキにグラスゴーは対人機銃を発射。直後に周囲の荷が連鎖的に爆発し、二機のKMFを飲み込んでいった。

S-2基地は軍事施設の存在する上層階と、発電施設とそれに燃料を供給するパイプラインの存在する下層階で構成されているのだが、防衛軍は敵がこの基地を利用するのを防ぐために、主要施設を防衛能力に支障が出ないレベルで爆破している。

そのため下層はいたるところが崩壊、崩落しており、廃墟と化している。

薄暗い非常灯だけがあたりを照らす世界で、二機のKMFが鎮座していた。

同日 1:57

地下施設・・・。

大破した二機のKMF。

特機、もといグロースターは片方のハーケンのワイヤーを出し切っており、その刃は岩塊に突き刺さっている。

さらには機体に多くの擦過痕と激突の後が残っていることが落下の衝撃を物語っていた。

グラスゴーは戦闘のダメージも相まって、その状態はひどいものだ。

左腕部は竹を裂いたようになっており、両足は着地の衝撃のためか蛇腹状にひしゃげている。

そのときグロースターのコックピットが開き、中から女性が姿を現した。

額から一筋の血が流れているが、足取りは確かである。

刀剣型の拳銃を構え、うつぶせに倒れたグラスゴーに近づいていく。

背部のハッチをひねると空気が抜けるような音とともにコックピット上部が吹き飛ぶ。

爆風を避けて身を隠していた瓦礫から飛び出し、銃を突きつける。しかし。

「子供・・・？」

少年兵は珍しくないが、どうも自分と渡り合った戦闘能力と合致しない。

そこに居たのはとても成人したようには見えない顔立ちをした銀髪の少年。

十七、八歳だろうか。

しかし体つきはしっかりとしており、立ったなら180cm近くはあるだろう。

どちらかというとモンゴロイド系の肌色の整った美しい顔は嗜血したのだろうか鮮血に染まっており、赤い耐熱服の腹部は破片が突き刺さって激しく流血し、左腕がおかしな方向に曲がっていた。

戦場に身を置く彼女でなくとも分かる、これはもう助かるまいと。

そう考え、銃を向けたときだった。

その双眼が開く。

燃え盛る瞳、常人にはありえない真紅はさながら血か劫火の色だった。

た。

（見ている！私を！）

この感覚は何であろうか！この感情は何であろうか！

彼女を見つめるその目に宿す意思は殺意か、憎悪か、歓喜か、それとも……。

向けられる視線の意味も自分の感情も理解できずに、聡明な皇女らしからず、彼女はこの重症の兵士に対する対処を逡巡していた。

殺せ！

百年戦争末期
アウトラギウス銀河
???

最初はナイフだった。いつかも覚えていないが、命令だったことは覚えている。

誰かも知らないが仕官か要人だったと思う。

殺せ！

俺はゲリラだった。大量生産され、飴のようにばら撒かれたアサル
トカービンを持たされて戦争に駆り出された。

誰かも知らない敵を撃ち、誰かも知らない味方が死んでいった。

殺せ！

AＴのパイロットになった。たくさん殺した。
大人、子供、女、男・・・人間。

殺せ！

第24メルキア方面軍戦略機甲兵団特殊任務班X-1に配属された。
今までよりたくさん殺した。

殺せ！殺せ！殺せ！

『神』がそう定めたからか、己の本能なのか。

『神』が死んだ後も俺は戦場を離れられなかった。
俺は・・・。

薄暗い電灯が見える。

「ぐうつ」

アバラが折れたのか呼吸をするたびに胸にかすれるような痛みが奔る。

「気がついたか」

敵・・・？特機のパイロットか。

アーマーマグナムは・・・取られているか。

反撃は現状の体の状態から不可能と判断……。体調の回復を待つ
か。

しかし・・・ずいぶん変わっている髪色だな。

「貴様の所属、階級、姓名は」

やはり聞かれるか・・・。

答えてやるさ、正直に。

「ギルガメス軍第207試験特殊班。階級は曹長。名前は・・・ジ
ヤック、ジャック・サイファー」

時刻不明

地下 位置不明

「ギルガメス軍？どこの国の組織だ！？」

「ギルガメス連合、メルキア政府」

「嘘を言うな！ギルガメス連合という国家連合体も、メルキアとい
う政府も確認されていない！」

「やはり・・・」

「なに？」

「ここは・・・どこだ」

「何を言っている！」

兵士は話し始める。

ある『神』の書いた歴史を・・・、もちろん自分の話ではない。
銀河を二つに分けた戦いと、兵士がどうしてここに居るか。

ただし仮にも雇われたのだから、機密やあの男については黙っておく。

目の前の女性はこのふざけた話を口も挟まず聞いていた。・・・銃
は向けたままだったが。

すべて聞き終えた女性は少しずつ質問をしていった。

しかし男個人への質問ではなく、話を補足するように聞いていった。

「嘘だとは思わないのか」

「嘘にではできすぎだ、それに・・・」

「それに？」

「私は配下にお前が欲しい」

『命を懸けて戦うからこそ統治する資格がある』という理念を持ち、

ブリタニア人と他を明確に区分することに厳格な彼女らしからぬことではあったが、よく分からない感覚が彼女を突き動かしていた。

「戦場でヘッドハンティングか・・・、今は脱出が先だ」

「お前、もう動けるのか」

「少し痛むが、問題ない。それより、あんたの名前は？」

少し驚いたような顔をしてから凜とした声で答えが返ってくる。

「私の名はコーネリア・リ・ブリタニアだ」

戦闘開始より11：27経過

S-1 基地跡地

搜索隊

S-1 基地は比較的損壊が軽かったが、下層部分がほとんど破壊されていることに変わりはない、いくつかの通路が瓦礫で塞がっていたために搜索が難航していた。

敵本拠地急襲から戻ったダールトン將軍と、撤収中の敵部隊を追撃していたギルフォード卿は一報が入るや早々に敵を撃破、もしくは作戦目標の破壊を達成し、すぐさま搜索隊に参加した。

しかし発見には至らず、隊員たちの顔には不安の色が浮かび、搜索隊長はMIA（戦闘中行方不明）の認定をその空気の前に切り出せずにはいた。

「あの・・・」

隊長が意を決したのと背後でガシャンと瓦礫が崩れるのはほぼ同時であった。

そこには重症の男に肩を貸してダクトから出てくる彼らの指揮官の姿があった。

同日

場所不明

鋼鉄製のマスクをかぶった人物が暗闇の中、淡い光に照らされて浮かび上がっている。

「あの男を確認しました」

《そうか》

男の目の前に誰か居て会話している雰囲気なのに、誰かいる様子は無い。

スピーカーのようで、人の発する音声のようで、心に直接語りかけているようでもある。

「それと仕込みのほうも」

《うむ、だが気をつけろよ。『奴』の二の舞になるわけにはいかん》

「心得ております」

《失敗は許されん、『肅清』に間違いがあつてはならんだ》

「はい。仰せのままに」

男も気配も消える。

あたりを闇が包み込んでいた。

魔女（後書き）

帝国軍。

それは殺戮者か、それとも名実ともに騎士か。

ファクトスフィアに死神が映るとき、

選択肢は二つ。

死ぬか戦うか。

次回『証明』

死神は騎士足りえない。

証明（前書き）

日曜に投稿するつもりが忙しく、遅れました・・・申し訳ない。
短めですがどうぞ。

証明

戦場で生まれた者にとって、戦いに終わりなど無い。

銃を握ることしか知らないのなら、戦場を求めてさまようしかない。当人が求めていようとしまいと関係なく、逃げることも許されない。硝煙と爆発の向こうへ姿を消した者だけが、戦いを終えることができる。

生き残ったものはうつろな目に敵を映して、ただ、引き金を引くだけである。

皇暦2017年 某日

ブリタニア軍 G1ベース 救護室

「脳にも異常は見られませんね。大丈夫でしょう」

「そうですか、良かった・・・」

白衣を着た軍医の言葉にほっと息をつくのは第二皇女コーネリアの騎士であるギルフォード卿と、ダールトン將軍だ。

文武どちらにも優れるコーネリアは臣下からの信望も厚く、負傷の報に兵士たちの間にも不安が広がっていたのだ。

「だから大丈夫だと言っただろう」

「ああ、まだ起き上がられては」

「まったく、お前は心配性だなギルフォード」

起き上がろうとするのをを支えようとするギルフォード卿を見てクスリと笑うコーネリア。

しかしすぐに表情を引き締める。

「あの男は？」

同日

別室

ジャック・サイファー

つんと鼻をつく匂いがする。

まぶたを開くが出血の影響かピントが合わない。

ようやく視界がはつきりしてくると、白い天井が視界に入る。

周りを見回そうとしたところでガチャリという音がして動きを制限される。

よく見ると白い拘束衣のようなものを着せられており、ベットになぎとめられていた。

そのままで辺りを見回すとどうやら救護室のようであり、他にもベツトが並んでいた。

どうやら脱出中に気を失い、そのままここに連れて来られたらしい。拘束衣が着せられているのは俺が敵のKMFパイロットだからだろうが……。

「敵兵に治療を施してくれるとはな」

どうやら突き刺さったコンソールのガラス片も取り除かれ、裂傷も縫合され、骨折の処置もされているようだ。

他を確認しようとしたとき、白衣をまとった女性が入ってきてこちらに目を向けると驚愕に目を見開き、何事かを口走りながら駆けていった。

同日

G1ベース 会議室

「本当ですか、それは？」

「信じられませんな・・・『異世界』から来たなどとは」

「しかし嘘をついているようにも思えん」

広い会議室にはコーネリア皇女、ギルフォード卿、ダールトン將軍、そして軍医の四名が集って『彼』を議題に話をしていた。

「あの年齢であそこまでの戦闘技術を持っているのは不可解だ。わが国以外がKMFを導入し始めたのは近年になってからだぞ、だが奴の言ったようにアーマード・トルーパーに乗っていたというのなら理解はできる」

「AT・・・。水陸、さらに宇宙空間での戦闘を想定した人型兵器
脚部のグランディング・ホイールで高速移動し、武器や装備のバリ
エーションも豊富。なんだかKMFみたいですね」

皇女は己が騎士の言葉にうなづく。

「しかしあの年齢で曹長とは・・・。」

ダールトン将軍がその階級に驚嘆する。

「戦時中だったそうだ」

「百年も戦争を続けてまだ戦い続けるのか・・・なぜ？」

「主義の違い、というやつだそうだ・・・。」

自分も戦う者ゆえか、答える皇女の顔は苦々しげだった。

気まづくなった空気を変えようと軍医が口を開く。

「検査の結果なのですが、脳の分泌物質に異常が見られました。それと・・・。」

「自然治癒の速度が速すぎる・・・か？」

「はい。もしかしたら何らかの生体改造を施されているかもしれない
せん」

「馬鹿な・・・」

ダールトン将軍が怒りに顔をゆがめて搾り出すように呟く。

武人と名高いダールトン将軍は戦うことを厭わない、どちらかとい
うと好戦的で武勲を立てることを好むが、曲がったことの嫌いな性
質であった。

「姫様はあの男をどうなさるおつもりですか」

「配下に加える」

「なっ」「姫様!？」

彼女の臣下二人が声を上げようとしたときだった。
救護員が一人飛び込んできた。

「先生！彼が目を覚めました！」

翌日 3:30

中東 上空 高度21000フィート ブリタニア軍大型輸送機格
納庫 サザーランド
ジャック・サイファー

『聞こえるか曹長』

「感度良好。計器オールグリーン」

『いいだろう。私が今回の降下任務をオペレートするヨーク大尉だ、よろしく頼む。早速だが時間が無い。ブリーフィングを開始する』

モニターに3Dマップが表示される。

『現在我が軍は敵の防衛線と対陣、敵の最終拠点を制圧せんとしている。しかしながら敵の中に未確認の新型兵器が存在するとの情報もあり、不安要素も無視できない。そこで今回、君が我が軍に所属するに足りえる実力があるかのテストとして、今回降下任務に当たってもらう。作戦目標は敵防衛施設群だ。質問は？』

「敵規模、および装備は？」

『規模は不明。装備はマシンガン、ロケットランチャー。なあに心配するな、弾薬はウエストのコンテナにたっぷり詰めてやる。間も無く降下ポイントだ、Show one's loyalty！（忠誠を示せ！）』

「了解」

通信が切れる。

「忠誠を示せ・・・か」

忠誠など存在しない、なら己の価値を証明するだけだ。

目覚めた俺を待っていたのは尋問と・・・なぜか勧誘だった。
地下で出会った特機の女パイロットはどうやら皇族であつたらしい。
俺の記憶が確かなら皇族は後ろに控えて政治をやっているものだったはずだがと言うと、戦線で戦うから統治する資格があると返ってきた。

よくわからないがそういう考え方もあるのだろう。

だが、勧誘の理由が「お前が配下に欲しい」とは・・・。
しかし銃を握るしかできない自分に他に何ができるでもない、答えは『Yes』だった。

『聞こえるか曹長。間も無く降下ポイントだ、とちつて砂漠のシミになるなよ!』

『降下まで180。投下シークエンス開始・・・あと120・・・』
レバーを握りなおし、深呼吸ひとつ。

『あと60。ハッチ開放』

『頼んだぜ、鳥になって来い!』

『5・・・4・・・3・・・2・・・1・・・ロック解除。降下!』

輸送機の後部ハッチが開き、鋼鉄の肉体が滑り出す。
空はどこまでも蒼かった。

同刻

中東

熱砂が燃える。

両軍はブリタニア側も防衛側も、ありつたけの弾薬を敵に叩きつけていた。

ブリタニア軍はKMF部隊以外も精強で戦車部隊が敵を圧倒していたが、突如現れたKMFを模造した兵器の火力によって押し返されていた。

戦車隊指揮官 J・P・ロック大佐

戦車隊の指揮官のロック大佐は指揮官シートで絶叫していた。

「クソツたれ！KMFもどきが！」

『我が隊の消耗率20%を超えました！』

『戦線に穴が空けられそうです！』

「後ろでワインくゆらせてるバカのケツでも詰めとけてんだ！我らが皇女殿下が来るまで気張れよ、蛆虫共！」

『『『イエス、マイロード!』』』

そのころ上空

ジャック・サイファー

サンドカラーのサザーランドが風を切る。

どこまでも続く蒼と砂漠のコントラスト。

間に立ち昇る煙がえらく無粋で、不愉快なものに見えた。

「間もなくパラシュートを展開し減速する」

『了解。地上のKMF部隊も間もなく到着する。すぐに行動に移れ』

「了解」

コックピット上部の追加ユニットが弾け、パラシュートが展開。一

瞬機体がガクンと揺れる。

十二秒でパラシュートを切り離し落下させ、ハーケンを地面に射出して減速し、着地。

砂漠の宮殿に場違いな死神が今、降り立った。

同刻

防衛軍 バミデス

防衛側は窮地に立たされていた。

先ほどもで有利に展開していた戦闘は、同盟国への侵攻をしていたはずの敵KFM隊の参戦により形勢は逆転し、さらに後方への敵襲の報によって混乱の増増と化していた。

「状況はどうなっておるか！」

「敵軍我がほうの中央を突破せり、戦線維持はきわめて困難だそうです」

「くつ、セルバムの軍もEUの軍も不甲斐無い……。こうなれば一時国外に脱出し……」

「敵KMF、至近！」

国王たる人物が吐き捨てた直後、彼が言葉をつむぐ機会は永遠に失われた。

「もつと早く降伏していればよかったものを……」

防衛隊の戦線は壊滅し、グロースターのコックピットの中でギルフォード卿が呟く。

戦闘はすでに終結し、敵機甲部隊は殲滅されていた。ふと目を移せば眼前の宮殿は炎と爆煙に塗りつぶされたようになっていた。

「なんという・・・」

ギルフォードはたった一人で、さらには降下してからわずかな時間でこの状況を作り出した男に戦慄した。

死神は炎の中で亡者がのたうち、這いずる中で整然と立つ。さながら生にすがりつく者を嘲笑っているようだった。

同日

G1ベース CIC

騎士服ではなく軍服といった出で立ちのジャックが直立不動で立っており、その胸に階級章がつけられる。

「これよりお前を我が配下に加える」

「拝命いたします」

ジャックは無表情に敬礼をささげた。

証明（後書き）

歴史は流れ続ける。

ひとつの国の滅亡もまた歴史の真実であり、
抗おうとする者を容赦なく押し流してゆく。
誇りは血と肉にまみれて薄汚れても、

なお、立ち上がるのは。

次回『日本』

死神は誇りなど知りはない。

日本（前書き）

今回はちよつと早めに完成。

毎週一本、大体4000～5000文字を目処にあげたいな・・・。
アンケートに内容を追加したので回答、感想お待ちしております。
このキャラはもうちよつとこうだ、というのから装備、オリキャラ
案まで、辛口評価でも励みになります。 よろしく願います。

日本

かつて、日本という国があった。
極東においてそれまで加工技術に特化し、資源が少ないという不利を補ってきた。

それまでの神聖ブリタニア帝国が保守的であったということ、大陸の各国家と比較的友好な関係が結べていたことも相まって、独自の文化を築き上げてきた。

しかし富士山で鉱山資源『サクラダイト』が新たに大量発見されると状況は一変する。

皇暦2010年8月10日　ブリタニア帝国、日本に宣戦布告。

戦争をほとんど経験していない軍隊にしては日本軍は善戦した。

実質的勝利は巖島だけであったが、住民を避難させる時間を稼ぎ、さらには東北、近畿地方に残存戦力を結集させ、いまだ練度低いナイトメア部隊を苦しめた。

しかし主要施設への爆撃、百里空軍基地の制圧による制空能力の喪失は手痛く、東北地方へ移転した国会は徹底交戦派と講和派に別れ不毛な罵り合いを続けていた。

そんな中枢木首相の訃報が飛び込み、主戦派はトップを失い日本は降伏。

その日、地図から国がひとつ消えた。

『巖島の奇跡』藤堂鏡志朗も、『からくり師』倉敷秀明も、終戦の混乱の中姿を消した。

皇曆2017年

日本海上空 輸送機

ジャック・サイファー

今俺はエリア11に向かう輸送機の中にいる。

新しい上司のコーネリア皇女はその総督に就任するらしいがそれにしても……。

「乗り心地が良すぎるな」

ギルガメス軍の採用していた大気圏内用の輸送機は、新兵どころか玄人までもが反吐をぶちまけるような代物だった。

「ほお、ソリヤありがてえ」

不意に後ろから声をかけられ振り返ると、無精ひげを生やした金髪中年の男が立っていた。

「おっと失礼。自分はコーネリア皇女殿下旗下の技術班長、サイ・マーストン。曹長だ、よろしく」

「自分は……」

「知ってるよ、ジャック・サイファー少尉。まさかあの皇女様がブリタリア人以外を配下に加えるたあね。まっ、かくいう俺もフランス人とのハーフなんだがね」

「そうか」

「何だよ、あつさりした反応だな……。まあいいや、そんなことよりあんたの機体だが、回収したグラスゴーも作戦に使用したサザーランドDも関節系のモーターが焼きついてた。あんたの機体を調整するときの参考までに意見を聞きにきたんだが……」

KMF乗りにとって逆らってはいけないのは三つ。

自分が死地に行くかどうか決定する上官、弾薬や食事をよこす兵站部隊、そして自分の命を預けるKMFを整備する整備員だ。

最初の一つ目は技量でなんともなるが、あとの二つはそうもいかない。

各関節の設定、ランドスピナーの調節、照準やセンサー系の確認。しばらく二人は機体の設定について言葉を交わしていたが、そこにギルフォード卿が書類を抱えて声をかけてきた。

「曹長。ちょっといいでしょうか」

「ん？おお、ギルフォード卿じゃないですかい、どおしたんです」

「ええ、皇女殿下の機体の件で。おや、あなたも一緒でしたか」

付け足したように言うギルフォード卿に、その機体をぶち壊した本人に対して含む言い方かとも思ったが、どうやらそういう感じでもないようだ。

しかし瞳にたたえた光は抜き放った刀身のそれであり、正しく忠誠の騎士である。

どうやらまだ信用されてはいないようだ……。

そんなことを考えていると、件の騎士は手元から書類を取り出した。

「間に合いそうですか」

「当たり前えよ、各部の損傷は酷くて外装は総取替えだったけど中身はモーターがいくらか逝ってただけだったしな。KMFは手足のとっかえが簡単でいいよ・・・」

修理は徹夜だっただろうにヒヤッヒヤと笑ってみせる曹長。

「しかし、あそこまで姫さんの機体ぶっ壊すたあ・・・。随分な兵だな」

「・・・」

ついつと横目にジャックを流し見る曹長に当人は沈黙し、ギルフォードは苦笑いを浮かべる。

「さつて、仕事に戻るかね。まだ親衛隊機の整備が済んでねーんだ、ジャム（弾詰まり）で死にたくねえだろ、騎士さん」

後ろ手を振って立ち去ろうとする曹長だったが、ふと足を止めて振り返って口を開いた。

「少尉、機体のカラーリング、どうする？」

問われて少し逡巡する。
だが死神が纏うべきは。

「黒に・・・右肩を赤だ」

隣のギルフォードがピクリと震えた。

レッドシヨルダー。

アウトラギウスに数多の恐怖と伝説を遺した部隊。

その真実は『

』を探し出すための不死の部隊だった。

ジャックもその終末期に参加したが転属から三ヵ月後にサンサ戦線に投入され、歴史書が示す通りレッドシヨルダーは解散となる。

幸か不幸か『

』とも会わずに終えた。

しかしアウトラギウスの人間は彼を見て、その外見にみな疑問を口にするだろう……。

運命《さだめ》はいまだ闇の中である。

大陸

場所不明

日本軍の軍服を着崩して和風の部屋の畳に寝転がってお茶をすする人物がいた。

寝とぼけたような瞳で茶碗を覗き込む男性は、三十台半ばという外見に似合わず老成した雰囲気漂わせていた。

「准将！ 准将オー——！」

「ハイハイ」

心底面倒くさそうな顔をしながら後ろ頭を掻いて立ち上がると、和室から出て鍵を開けるやいなや一人の女性が飛び込んでくる。

「准将！日本で各組織が蜂起しているようです！我々も・・・」

「まったく、いきなり飛び込んできてソレは無いんじゃないの座間中尉・・・。それに今回の蜂起はやめたほうがいい」

「なぜです！」

ポリポリと頬を掻いて困ったような顔を見ると、彼は中尉を和室に上げ胡坐を掻き、一息つくと口を開いた。

「中尉、今回の蜂起が何を発端にしているか知っているかい？」

「もちろんです！『ゼロ』によるクロヴィス皇子の殺害ですよね」

「そう。人間ってのは誰かが成功すると自分も、ってのがいるもんさ」

「でも、機というものがあるでしょう！」

しかし准将は首を縦には振らない。

「いいかい中尉。今回の各地の蜂起は、情勢の変化の常である一時の波のピークでしかない」

ここでお茶をすすって一息つくと「それに」と続けて、

「ブリタニアもゼロも行動のその動機が見えてこない。僕はそんな

の、嫌だね」

ゆっくりと立ち上がると伸びをして全身をほぐす。

「いずれ機会が来る。あせったら負けだよ、中尉」

振り返り柔和に微笑む男性。

彼こそフクシマ攻防戦でブリタニア軍に煮え湯を飲ませ、民間人の避難を完遂した『からくり師』倉敷秀明准将その人である。

同日

日本上空

ジャック・サイファー

眼下にはトウキョウ租界とモノレールを挟んで新宿ゲッターが見える。

さながら対照的で天国と地獄のようだが、聳え立つバベルの塔に住む者たちは本当に天国なのか。

腐った果実と枯れた果実、どちらの価値があるかなんて飢えた者には関係など無い。

「ここにいたか」

振り返れば気の強そうな瞳がこちらを見ていた。

「残念だがゆっくり観光している暇は無いぞ、各地の叛徒どもを鎮

「圧せねばならん。お前には突撃部隊に参加してもらう。励めよ」

敬礼を返すと口元に微笑を一瞬浮かべて歩き去っていった。
温くなったコーヒーを一気におろす。

不味さに定評のある軍のコーヒーは、冷めたことで泥水を流し込んでいるような気分になったが眠気覚ましには十分だった。

輸送機は再びその巨体を空に持ち上げ、兵士たちを地獄へ連れて行く。

翌日 11:00

『侍の血』本拠

「GO!GO!GO!」

「弾薬どうした！早く持って来い！」

「クソツたれ、クソツ・・・」

「死ねえ！ブリキ野郎」

鉤山を利用して建造された基地は阿鼻叫喚の場と化していた。

自走砲の長距離射撃に吹き飛ばされる者、崩落した岩盤に押しつぶされる者、敵のか味方のかもわからぬ弾丸の嵐にさらされる者。

狭い坑道の中、いつ現れるかもわからぬ敵の影におびえてなお進む兵士たち。

現れた敵をしとめても生のありがたみを感じる前に、他の誰かがその命を搔つ攫っていく。

空ではヘリと機銃が激しい応酬を繰り広げ、大地は戦車がその身を震わす。

そのやや後方で鋼鉄製の騎兵が五機、いまかいまかと「進め」の合図を待っていた。

やがて橋頭堡が確保されると騎兵たちは無機質な肉体と精神を以って、前進を開始する。

荒地用の追加ユニットによって得られる驚異的な機動性によってその身を弾丸と化した騎兵は、機銃砲座も戦闘車両も一緒くたにしてスクラップに変えていく。

騎兵の中には光を反射することさえない漆黑にカラーリングされたKMFが、不気味に右肩だけを光らせる姿が在った。

ジャック・サイファー

坑道の中は思いの外明るかった。

壁には照明が灯り、輸送用のルートだったのかKMFが通れる程度の幅もある。

500mほど進んだところで広い空間に出る。

自分のほかの四名も周りを警戒しつつ中央付近に近づいていく。

次の瞬間、いきなり辺りが暗闇に包まれ、『パパパパパッ』という発砲音と鉄の爆ぜる音が聞こえ、とつさに後ろにダッシュをかけ退避し、同時にNVDを起動し暗視モードに切り替える。

カメラにはコクピットを打ち抜かれた二機と、ダルマにされた一機の味方、そして三機の……。

（グラスゴー？いや、『無頼』ってヤツか）

グラスゴーのコピーである無頼は近年姿を見せ始めた機体だった。その機体性能は技量によつてはサザーランドに勝るほどである。

無頼は散開し、二機が生き残ったもう一機の味方に襲い掛かり始め、もう一機が真つ直ぐに突っ込んできた。

無頼のアサルトライフルは忠実に弾薬を吐き出し続けるが、照準通り空を切るだけで反撃にリニアカノンをぶち込まれると腹部からオイルをぶちまけて沈黙する。

配線のショートによつてオイルに引火したか、大破した無頼はパイロットを乗せたままオーブンレンジと化した。

とつさにサーマルにカメラを切り替え索敵すると、組み合う無頼とサザーランド、そして頭部が吹き飛んでイジェクト済みの敵機が見えた。

こちらに背中を向けた敵機に容赦なくハーケンをぶち込むと、損壊したコックピットから赤黒い液体が滴り落ちた。

『すまん助かった』

礼を言う寮機に本部への連絡をするように促しあたりに耳を澄ます。すでに戦闘の音は聞こえず、死者を弔う静寂と闇だけがあたりを包み込んでいた……。

日本（後書き）

道化。

それは他者に嘲笑われる者。

そのものの自身の価値観ゆえか。

それとも周囲の価値観ゆえか。

どちらが正しいのか、どちらも間違っているのか。

次回『不解』

誰も肯定などしはしない。

不解（前書き）

一週間遅れてすいません、最新話更新です。

執筆中いつも聞いているのは、赫奕たる異端のOP『風が知っ
てい
る』

いい曲だ・・・。

不解

機械は嘘を付かない。

人間は嘘を付く。

理論は嘘を付かない。

思想は嘘を付く。

では神は？

トウキョウ租界　ブリタニア軍駐屯地　KMF格納庫　13:00

赤い肩のKMFの前でジャックとマーストン技術曹長が話していた。

「特別派遣嚮導技術部？」

「ああ、そーだ。あとで姫さんから辞令を受け取るこつた」

「なぜ？」

「お前さんがブリタニア人じゃないからさ。『ブリタニア人でないものがKMFに乗るなんておこがましい！ナンバーズはナンバーズ同士仲良くしろ』って声が出ているらしくてね。まったくお偉方は頭が固くて困るよ、命令系統ってモンをわかってるのかね」

やれやれと首を竦めて見せる曹長に答えず、ジャックはただ資料を眺めているだけで答えない。

「安心しな、整備員はつける。同じ場所に間借りするだけさ・・・
ってオイッ」

ジャックはすでに歩き去っていた。

同日 14:41

エリア11 総督府

ジャック・サイファー

カツカツと床に足音が響く。

外装が華美なわりに総督府は謁見室、貴人室を除くと簡素で無駄な
装飾を省いた造りになっている。

租界の中でも最高峰の高さを誇る建物。その一室に総督の執務室は
存在する。

さすがにこの部屋の廊下には絨毯が敷かれており、扉も外見は木目
調のものになっている。

警護の衛兵に敬礼すると、二人のうち一人はフンと鼻で笑うだけだ
ったが、もう一人は律儀に敬礼を返してくれた。

木製にしては重い扉を開くと、このエリア11の総督たるコーネリ
アと、もう一人良く似た顔つきの女性が視界に入る。

「来たか。少尉」

見知らぬ女性の方を向いていたコーネリアは、こちらに気づくと机
の上から資料を一枚取り寄せ、俺に近寄るように促した。

先に述べたもう一人の女性はその様子をただ黙ってみてようだった。

「辞令を受け取りに来ました」

「うむ、これだ。すまん、お前だけという訳にはいかんだ。ゆるせ」

謝辞に敬礼で答えると、やはり傍の机にいるコーネリアとよく似た女性が気になった。

その視線に気づいたのか女性もこちらを見ており、それを見たコーネリアが口を開く。

「こちらはユーフェミア副総督だ」

「初めまして。ユーフェミア・リ・ブリタニアです」

リ・ブリタニアということはコーネリアとなんらかの血族関係にあるのだろうか。

そんなことを考えていると当の自己紹介した本人が、なんだか困ったような顔をしている。

心なしかコーネリアの額に井桁が奔っているように見え、そこでようやく気づいた。

「ジャック・サイファー。階級は少尉です」

極めて無愛想な声ではあったが、目の前の女性はそれで十分満足したようだった。

「コーネリアお姉さまをお願いしますね」

「ほう、それはどういう意味かな副総督」

「だってこの人なのでしょう？お姉さまが話していらしたのは」

「な、ユ、ユフィ」

妹の言葉にあえて『副総督』と言って揶揄したつもりが、逆手に取られ狼狽したコーネリアは誤魔化すように一つ咳払いをし紅茶を啜った。

そこまでのやり取りを見たところで敬礼をして踵を返し、俺は執務室を後にした。

同日 11:12

ブリタニア軍 第8搬出口

格納庫に着くと、なにやら拗ねた様子のマーストン曹長が缶コーヒーをちびちびと飲っていた。

やって来たジャックに不機嫌な顔を突きつけていたが、トラックに乗り込んでいくジャックにただ一言、「息災でな」だけ言って仕事に戻っていった。

トラックのドライバーは乗り込んだジャックには目もくれず、ベルトを締めると同時にアクセルを踏み込んだ。

エンジン音のしないトラックは思いの外居心地悪く、しばらく瞳を閉じていたジャックは十分もすると眠ろうとするのを諦めて、外の

景色を眺めていた。

特別派遣嚮導技術部はアッシュフォード学園の大学部に間借りしており、この出向はそれにさらに居候するような形である。

租界の中心部近くに位置するアッシュフォード学園は、エリア１１がサクラダイト発掘とそれに付随する加工技術によって大きく経済発展を遂げたために本国出身の学生も多く、緑多い自由な校風だ。

一時間も走ると学園周辺の市街地に入る。

学園周辺は学生を対象にした商業も活発で、売店や商店も目にする事ができる。

昼時でも終業の時間帯でもないために人影はまばらだが、それでも人々の顔は明るい・・・ナンバーズを除けば。

感慨にふける間も無く市街地を抜け、白い門の前に着く。

敷地にトレイラーを見かけ、目を凝らそうとしたときガクンと車体が止まった。

ドライバーはやはり何も言わずにトラックを降りていった。

後を追って外に出ると、眼前にそびえる大きな建物。

白塗りの壁をした箱型の建造物のシャッターが、KMFや資材の搬入のために開かれんとしていた。

そうこうしている間にもトラックの荷台のシートが剥がされ、一見乱雑に見える固定のされ方をしたKMFが姿を現す。

通常のサザーランドにはできない仰向けの体勢に寝かせられたサザーランド改のハッチを開き、乗り込む。

サザーランド改はゆっくりとその機体の上体を起こし、立ち上がった。

そのまま歩を進めて建物に近づいていくと、軽やかにシャッターを潜っていった。

格納庫内に歩を進める黒いKMF、それを興味深そうに見つめる男がいた。

KMFはそのまま指定位置まで移動すると停止し、頭部が前に倒れるようにしてハッチが開く。

パイロットはワイヤーを使って降りてくると、金属製の床にゆつくりと足をつけた。

一瞬の間をおかず男は銀髪のパイロットに至近し、そのどこかへらへらしたような顔を常識以上の範囲まで近づけるなり口を開いた。

「キミがアレのデバイサーかな？」

「ちょ、ちよつとロイドさん！」

男性のいきなりの振る舞いを見て横に控えていた女性が慌てたように諫めるが、男性もパイロットも気にした様子は無く、ニヤついたような顔と無愛想な顔を突き合わせていた。

その様子に女性は口を開きづらそうな風にしていたが、埒が明かないと感じたのかパイロットに声をかけた。

「私は特別派遣嚮導技術部所属のセシル・クルーミーです。こちらは主任のロイド・アスプルンド伯爵、すいませんこういう人ですの
で……。えつと……」

「ジャック・サイファー、階級は少尉。世話になる」

返答はやはり無愛想なものだったがセシルは満足したように頷いた。

ジャックはそこで辺りを見回すと、何かを見つけたのか一方に注目し始めた。

シートを被せられ、まだ実戦の傷みの見られない白い脚部のみが覗くソレ。

ちようど作業員がシートを外しにかかり、被さっていたものが除けられると白き騎士が姿を現す。

「あれは私たち特派が開発したZ-01 ランスロットです。私たちの主な仕事はその開発整備で・・・」

その視線に気づいたセシルは説明を始めようとするが、横でなにやら資料を読み漁っているロイドに気づいて何事か口を出そうとする。しかし、その当人は何やら真剣な眼で（外見上はいつもの不真面目な様子だが）いたので声には出せず、横からその資料を覗く。

そこにはいくつかの戦闘記録が記されていたが、専門家たるセシルの眼から見ればそれが異質と解る。

グラスゴーという旧式でグロースターと相打つのは理解できる。

そこには純粋な機体性能だけでなく、経験、戦術、地形、その他いくつもの要因が介在して勝敗が決する。

ただ回収したグラスゴーのデータが問題だったのだ。

各部のモーターの負荷、戦闘中の機体反応、動力部の出力推移、そのほぼすべてが機体性能の限界値、いやそれ以上を叩き出している。

「キミ、ちょっといいかい」

好奇心の強そうな瞳と、錆び付いた紅が交錯した。

KMFパイロットに限らず、ブリタニア軍人は総じて身体能力の検査を受ける。

枢木スザクがデバイサーにスカウトされたのもこの検査結果によるものだ。

しかし他にも判断基準はある、その一つに挙がるのがシュミレーターだ。

バーチャル・リアリティ
実戦さながらのVRでの訓練は、実機の前に誰しも一度は通る道だ。新技術開発のための部署である特派にも当然のごとく存在し、データ収集に活用されている。

当然ながらシュミレーターはランスロットのコックピットを模したものである。

その中の機器、センサー類が明るく点り、モニターに仮想空間の市街地が表示される。

その後はひたすらシュミレーション・コンピュータの指示に従って操作していく。

歩行、走行、立体機動、射撃、近接。

あらゆるデータが蓄積、分析されて、数値として紙に吐き出されていく。

初めはいつもの表情でそれを見ていたロイドだったが、やがて顔からいつもの表情が消える。

そのままシュミレートが進んでもそれは変わらず、終わるまで何かを深く考え込んでいるようだった。

やがてすべてのシュミレート項目を終えたジャックが出てくるがそれにも反応せず、ジャックは敬礼して用意された寮に戻っていた。

「ロイドさん、これ・・・」

なにも言わないロイドにセシルが心なしか震える声で呼びかける。
手に持ったグラフには高い反応値と性能値、そして適合率99.4%という驚異の数値が記されていた。

「デバイサーは・・・」

「彼はダメだ」

不安げに声を出すセシルだったが、ロイドはばつさりと言った。

「ボクが欲しいのはランスロットのパーツであって、デバイサーだ。かれはそうじゃない」

いつに無く真剣な表情のロイドはそれ以上何も語ることは無く、セシルも聞こうとしなかった。

ただ彼は何かを畏れているようだった。

ジャック・サイファー

ふと空を見上げる。

周囲の広大な敷地に灯りが少ないせい、頭上には満天の星空が広がっている。

今まで星の見えるような所にあまりいなかったのと、いてもそこが宇宙が戦場だったために星を見上げるというのはこれが初めてかもしれない。

しばし立ち止まっていたが、やがてまた歩き出す。

その双眼にアンタレスの輝きを湛えたままで。

不解（後書き）

過去の出来事により決意した者がいる。

戦乱の炎の中に己を束縛した者がいる。

どちらも力を欲し、他者の、あるいは自己の贖罪を望んだ。
行くは修羅の道。

進めば決して戻れない。

次回『脅威』

二人の修羅が鬼神と出会う。

アンケート（5 / 7 編集）

大筋は決まっていますのですが、アンケートを取りたいと思います。

プラン1

ユーフェミアとe t c生存

赤い肩の戦士ルート

プラン2

ユーフェミアとe t c死亡

赤い肩の死神ルート

プラン3

その他

プラン1だとスザクの扱いに困る。

プラン2だとR2へのつながりに困る。

結局・・・本編主人公をどうしようか迷います。

まあどの道むせる展開になるのは変わらないんですけどね。

感想に書いていらっしやる方もいますがATについても書いていた
だけとありがたいです。

追加

ヒロイン誰にしよう・・・。

タイトルからいくとコーネリアさんですが・・・。

まあハーレムだけは主人公的にありえませんが。

お詫び

本日、名無し様より感想を頂きました。

確か内容は

ボトムズをもう一度見てこい。

書けるのはそれだけだ。

というものでした。

しかしながら、日常のストレスでフラストレーションを溜め込んでいた私は、その感想をありがたいと捉えられず、激情のままに削除してしまいました。

後から、情けない行為に走ってしまったことに思い至り、それについてお詫びしたいと思います。

さらに、今回の感想でもう一度拙作を読み直したところ、名無し様の仰るとおりボトムズの空気が表現できていないことが気になりました。

プロットも存在するため、急に話を変更するわけにもいきませんが、もう一度ボトムズを見直したいと思います。

そこで一ヶ月ほど休載させていただきたく思います。

どれほどの方がこの拙い文章を読んでいただいているのか分かりませんが、ご迷惑をおかけします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2723s/>

魔女と異端と赤い肩

2011年8月23日12時46分発行